

そして二階の應接間へ案内した。

「春夫は何う思ひますか」とか「虎雄は？」とか聞いた。

「僕は此の詩を宣傳ビラのように印刷して、十銭位で號外のやうに賣りたいので、金を借りに來たのだが」

若い體格の好い男が、龜之助と變つて紙包みを持つて來て、詩の原稿料だと言つてくれた。何か其の男と三十分ばかり話したようだ。

紙包みを開けてみると、三圓しか這入つてゐなかつた。僕は憤慨した。

電車にも乗らずに神田の、移轉したばかりの大錠閣へ行つた。

便所を借りて、編輯室は二階だと言つたので上つて、椅子に腰を掛けた。

松本弘二が考へに耽つてゐる様な顔をしてゐた。豚々肥つた男がゐた。

「君は印刷屋みたいですね」僕が言ふと其の男は何處かへヒツコンだ。

「あなたは人の室へ這入つて來るのにマントを着たなりで、失敬ぢやないですか」弘二が言つた。

僕は之まで遇つた事はなかつた。